學界展望

美學界の近狀

井島　勉

日本の美學界において、近年の最も特筆すべき事件は、昭和二十五年に結成された美學會とその機關誌『美學』の發刊である。

美學は、官私立諸大學の文學部開設以來、一講座として設けられて來た學科であるが、未だ嘗てその相互の連絡機關が組織されることもなく、戰後の新制大學の多くに美學の講義が置かれるやうになつてからも、この狀態が續いてゐた。從つて機關誌の如きものの刊行が企てられる筈もなく、美學を主題とする專門的な學術雜誌は全く皆無であつた。ところが遂に全國の美學者もしくは美學研究者を連繫する學會が『美學會』の名をもつて創設され、その機關誌として季刊の純學術雜誌『美學』の發刊を見るに至つたのである。

これと相前後して美術史學會・日本藝術學會・日本演劇學會・日本音樂學會・東洋音樂學會も結成され、後に以上の六學會は、相互の連絡を圖つて研究の發達に資する目的のために、それぞれ評議員を選出して「全日本藝術諸學協議會」なるものを組織し現在に及んでゐる。

美學會は、入會に特別の制約を設けず、入會申込者をもつて會員としてゐる。事務連絡の本部を東大内に置き、實際の運營は、東大に事務所を置く東部會と、京大に事務所を置く西部會に二分して、各々別個に研究集會を開催してゐる。特に西部會は、關西各地の諸大學を順次會場として研究發表會を開く方針を實行して來た。別に毎年一回、東西合併して全國大會を開催することになつてゐる。これは二日間に亙る會員の研究發表と、公開講演會及び一日の見學とから成る大會であるが、すでにその第一回を昭和二十五年十一月京大において、第二回を二十六年十一月東大において、更に第三回を二十七年十月京大において開催した。

『美學』は、原則的に會員の研究論文數篇と書評・内外學界消息などをもつて編輯される季刊誌であるが、既にその第十一號を發行した。編輯本部は東大内にある。

以上の如き輪郭をもつて、美學會の學會活動は、兩三年來、すでに活潑に始められて來た。それは全會員の協力の結果でもあるが、逆に學會の發達は、會員の研究意欲を昂進せしめ、學的内容を充實せしめて、美學の進歩に重要な役割を演ずることとなつた。

一口に美學といつても、その内容は極めて複雜多岐に亙つてゐる。前述の藝術諸學協議會を構成する各學會の分野から見れば、美學は特に狹義の理論的哲學的美學理說のみを指すかの如き觀を呈するけれども、實際は必らずしもさうではなくて、各種の藝術研究をも包括する廣義の場合として解してゐる。試み

に大會における研究發表の題目や『美學』に掲載された論文の表題を見れば、純粹な理論美學の他に、美術・文藝・音樂・演劇・映畫などに關する研究も包括されてゐる。それは、新制大學の教養科目として掲げられる美學（もしくは藝術學）の場合は勿論のこと、その專門科目としての美學、或は舊制大學における美學講座の場合と事情を同じくする。

戰後の顯著な一つの現象として、美學界の量的な盛況を擧げることができる。舊制大學における美學專攻志願者は各大學ともに激增したし、あらたに設立された新制大學の多數が、少なくとも教養科目としてでも、美學の講義を設け、却つて適當な講義擔當者の拂底に惱んでゐる狀態である。更に、大學關係以外の場所においても、急激に昂まつて來た文化熱・藝術熱の風潮、とりわけ西歐藝術移入の隆盛などに煽られて、一般の藝術愛好者たちの間では、美學といふ言葉は極めてポピュラーなものの一つになつてしまつた。必らずしも美學の眞義が理解されてゐるわけでもなしに、美學といふ言葉が人々の口にのぼり、人々の關心を集めてゐるやうである。藝術を愛することから、更に藝術を理解しようとする段階に至れば、必然的に美學的追究を要求するやうになるのであらうが、少なくとも現段階においては、正しい美學知識がさほど普及してゐるやうにも思へない。

このやうな社會狀勢は出版界にも反映し、本格的專門的な學術書よりも啓蒙的乃至は通俗的な著述の方が遙かに多く出版されてゐる。元來、美學においては、これまで適當な概論書・入門書に乏しかつたうらみがあり、それが近年に至つて次第に補なはれて來た形であるが、なほ獨自の立場をもつて貫かれた體系的な著作は稀である。それでも、中井正一氏『美學入門』・山際靖氏『藝術學通論』・矢崎美盛氏『藝術學』・稻垣一穗氏『近代藝術の見かた考え方』などは、單なる通俗書ではなくて、それぞれに特色のある啓蒙の書として推奬さるべきであらう。

美學會編輯の季刊誌『美學』は、概して特輯號的な表題を掲げて、各號數篇の論文をこれに當ててゐる。その大體の方針は委員會の席において議せられるのであるから、この表題は美學界の關心の所在をいくらか暗示するものといへるであらう。參考のためにここに列擧するならば、三號「藝術批評の問題」・五號「實存論的美學」・六號「音樂美學」・七號「藝術史の方法」・八號「海外美學思潮」・九號「近代藝術の動向」・十號「藝術における時間と空間」・最近の十一號は「藝術的表現の構造」と銘うつてゐるが、これは第三回の全國大會における研究發表のうち比較的表題に近いものを輯めたのである。これらの表題を通じて、現代美學の動向が、現實の藝術研究、殊に現代の藝術思潮と密接に結びついてゐることが窺はれるであらう。美學は、特に現代において、現實の藝術思潮の動きから自己を疎外することができず、また藝術研究の方法論的反省に無關心たり得ないことを證明するのである。勿論これら各號に載せられた論文或は學會における發表のうちにも、優秀なる原理論的な研究がないわけではない。けれども一般的にいへば、美學と藝術との結合には、從來には見られなかつたほど密接なるものがある。

嘗て日本の美學においては、哲學的思辨的なドイツ美學の影響が壓倒的であり、特にその理想主義的美學と現象學的美學とが有力であつた。この傾向は、今日といへども、必らずしも弱まつたと思へないが、戰後には、アメリカ美學の影響の擡頭も見逃すことができない。デューイの『經驗としての藝術』の飜譯を始め、アメリカ美學の祖述や紹介も珍らしくない。これは舊いドイツ流の美學に對する反動として、概して實證主義的・社會的心理的立場を採ることが多く、その意味においては頗る示唆的であるが、半面では常識的考察に過ぎぬ場合も少なくはなく、もしもこの一面のみの影響を受け容れるにとどまるならば、日本の美學界は、難解なる理論性よりも平明なる卽物性をよろこぶ現代風潮と結びついて、學問的には必らずしも好ましい結果を得られぬ惧れがあるであらう。藝術に關する限り、その最も卽物的な態度は鑑賞の立場といふべく、理論の立場において強ひて卽物性に定着しようとすれば、却つて主觀的な印象批評や獨斷的な論辯、更に藝術の他律的解釋に陷る危險がないとはいへない。藝術の正しい理解、換言すれば原理よりの藝術の理解が志される場合には、例へば藝術を社會的現象として把捉しようとするときにも、そのやうに把捉されなければならない藝術の本質とその把捉の方法に關する美學的檢討に先立たれねばならず、いきほひ、たとへ必らずしもドイツ流とはいへぬにしても、哲學的美學の使命は依然として存續するのである。現にアメリカの『美學雜誌』にしても、しばしばこの種の論文を掲げてゐるし、復活したドイツの『美學年報』やフランスの『美學雜誌』なども、この意味において大いに期待されるのである。

とはいへ、獨斷論的な觀念論の美學や經驗心理學的美學は、現象學的美學によつて既に止揚ずみである。現象學的美學は、更に美と藝術の成立を人間的實存の根基にまで遡のぼらすべき一つの可能性を孕んでゐるが、それらの展開はむしろ今後の課題に殘されてゐる。『美學』が「實存論的美學」を特輯した時にも、執筆者の論旨にも、また紹介されてゐる外國殊にドイツの美學乃至哲學にも、特に實存論的美學を標榜するに足りる思想の體系は、稀薄であり未熟であつた。

社會的觀點よりする藝術の理解も、今後の研究を期待するほかはない。この立場は、特に藝術史の理解に關聯して重要な課題であるが、その正確な美學的究明は未だしの感がある。藝術をいたずらに「環境」の内に埋沒せしめるのでなく、また藝術を單に他の社會的事象と置きかへるに過ぎぬのでなく、眞に具體的な藝術と社會との關聯を闡明することは、容易ならざる事業ではあるが、しかし當然解決を要する命題なのである。藝術の唯物論的解釋も、興味ある問題の一つであるが、それも目下のところは極めて幼稚である。一つの政治的主張としては如何に熾烈であり得ても、有力な美學的思想とはなり得ない何等かの理由が、この立場及び藝術の本質の中に存するのかも知れない。

舊制大學においては、美學美術史と稱する一本の講座を立てることが原則的であつた。單に制度上の事實のみならず、美學

と美術史との內面的なつながりも、はなはだ密接なるものがある。心ある美術史はその方法論的な反省を美學から得てゐるし、內容の充實した美學は、思索の素材や指針を美術史から見出してゐる。美學と美術史との提携は、過去においても將來においても、不可缺のことといはねばならぬ。第三回の美學會大會においても、特にその一日を割いて美術史學會との合同研究發表會を開催した。兩學會はむしろ一學會に屬する二部門の關係にあるべきであらう。

戰後には、外國文學の紹介に並んで、外國美術の招來が盛んである。殊にその近代美術は、日本の美術家たち並びに美術愛好者たちの熱狂的な讃美を博してゐる。招來作品の展覽會のみならず、圖版による紹介も大いに普及し、それとともに西歐の近代美術に關する論評が極めて旺盛である。日本の美術と、日本そのものの近代化に對して貢獻するところは多大であらうが、しかし美術について論じることが直ちに美學上の論議なのではない。美術に深い共鳴を寄せ、その作者について語ることと、美術をその原理から論じることとは、本質的に別である。率直にいへば、近代美術に關する評論は極めて活潑であるに反して、近代美術に關する美學的研究は未だ寥々たる狀態である。近代美術そのものの由來、近代性そのものの本質は、未だ十分には理解されてゐないといつてもよからう。その中にあつて、植田壽藏氏『近代の繪畫の方向』は、周到なる美學的思索に裏づけられて極めて綿密且正確である。本格的な美學上の論著として、敎へるところは絕大である。われわれは更に美術における近代性の特質を、文學や世界觀の問題との關聯において精神史的に把握する別の立場を期待することも可能だらうと思ふ。

美術について述べた事柄は、文藝に關しても妥當するであらう。夥しい外國近代文藝の飜譯、文藝評論の氾濫にも拘はらず、多くは作品から抽象せられた思想や言語を論じ、作品とかかはりのない作家を語つてゐる。眞に文藝作品の藝術性に觸れたものは乏しい。それは、評論者の美學的思索の不足にもよるのだらうが、美學者側の、文藝に關する美學的研究の貧困にも歸せらるべき現象である。文藝學に寄せる美學の協力が大いに切望されるわけであるが、これに應へるかの如く、竹內敏雄氏『文藝學序說』は特に方法論に關する近來の好著であり、氏の近業『文藝のジャンル』と共に、文藝美學書の白眉である。更に音樂については、野村良雄氏『音樂美學講話』や張源祥氏『音樂論』の如き美學上の注目すべき研究が現はれ始めてゐる。映畫や演劇については、比較的に數多くの若き研究者の出現にも拘はらず、本格的な美學的研究は、今後を待つほかはない。

近年、日本の敎育界において、特に美術敎育の分野が活況を呈してゐる。藝術愛好の社會的風潮や近代美術禮讃の一つの餘波と見られなくもないが、藝術と人間形成との根源的な關聯を考へ併すならば、むしろ當然のことといはねばならぬ。美術敎育、或は一般的にいつて藝術敎育の問題は、ひとり美學上の問題たるのみでなく、心理學・敎育學・社會學などの領域にも亙る問題であるが、しかしそのやうな隣接學科との協同における

美學の役割も、決して無視することができない。すでに全國の美術教育者を會員とする日本美術教育學會が京大を本部として組織され、私も『美術教育の原理』なる小著を出した。美學に對するこの方面よりの要望は、今後一段と增加するであらう。

以上によつて、私は美學界の近狀を概略的に敍述したつもりである。更ためて省りみるまでもなく、美學と諸藝術研究との關係は、はなはだ根源的でもあり、複雜でもある。美學を缺いて諸藝術研究は成り立たず、諸藝術研究を除いて美學は成り立たない。しかも純粹な美學理論と美術理論と音樂理論は別である。だから現に諸藝術を對象とする學會の會員が多くは美學會の會員でもあるやうに、いはゆる藝術諸學協議會を構成する學會の關係は、更に緊密化されて然るべきである。むしろ一歩を進めて、これらの學會を一本の學會に屬する諸分科の如きものとして再編することが、理論的には最も適切であると思はれるが、現狀は遺憾ながらそこまで行つてはゐない。今後に殘された切實な課題である。

（筆者　京都大學文學部（美學美術史）教授）

彙報

受贈雜誌

宗教研究（日本宗教學會）第一三二號

經濟論叢（京都大學經濟學會）第七十卷第五號、第六號

山口經濟學雜誌（山口大學經濟學會）第三卷第二號

一橋論叢（東京商科大學一橋學會）第二十八卷第六號、第二十九卷第一號

人文研究（大阪市立大學文學會）第三卷第十二號、第四卷第一號

基督教研究（同志社大學神學部內基督教研究會）第二十六卷第二號

經濟學雜誌（大阪商科大學經濟研究所）第二十七卷第一・二・三號、第四・五號

國語國文（京都大學國文學會）第二十一卷第十號

文化（東北大學文學會）第十六卷第六號

立命館文學（立命館大學人文科學研究所）第九〇・九一號

横濱市立大學紀要（横濱市立大學）第十三號

山口大學文學會誌（山口大學文學會）第三卷第二號